花傳抄 第三巻

チ 12
1656
3

柳謡といへるも哥の道よりおこれる也川
なかれに浅き山乃井とれ我等ならぬよみ〳〵て長
哥と唄をそれよりふしをつけて謡と
号せり然に依て謡をうたハんと思ふ人
ハ哥道なくてハかなふまじ〳〵此哥
道を心掛ける事肝要なり哥道なき人
ハ謡もこれ我も川より成事を云ふここ
ろおほくてかなふまじきを成事乃ミまで

1656

あり先人哥道も四ヶにあれは月花を見
てそ雨のふるをも風の吹にも虫の鳴音
をきゝても何となく哀やと心を
付し一つも思ひ合て謡ひ面白あり故に
心懸候ては何時にても貴人高人の御前
又は晴の時も俄謡に御まへすなはち出たる
謡口にある物あり第一に字心かいかり文字
うつりのへちかゆる物数あるたりを入
くるか上下一字律か二字つゞか三字あかり

三字さかりにつひきて文字かなりあかり物
あしたつくるあかり付と拍子切てあつかつて
しかまりあるへかなる甚外次第道行
一付物し物立にふ承てふかふし仕候し声仕し
ことに一せいこうつひるごと付曲舞あけそ
ろんさ入れあいの謡あしきうかくれと
くあめ謡にけられ人常に是をうたふと
いへとも心を急て謡人あり然れくのこと
くぬと謡分五音たゝしく謡第一の習也

又十符と云事有是あまりいらさる物之
かゝりたれおかしくうこひよけきうせいハて
ハ筆にハかきかゝりしたゝ五音と云事を謡
分称に面白きと云事あり謡損の事
あらし是にあつかハれ条々かくのことし

一 五節句の謡の事

正月ハ高砂難波を本とせり高砂ハ松をいひ
并々ある謡あり初春よ子の日君か松とて
是をいひ并給に万人の家にハ松を門にた

てる事松そ千年まて并をたもつ川の上に
きりて木にも枝葉をかさね事も茂れハ
いる花も落葉のさかひもなしさすか木立
その川に雨風にまけさる事そある事
とそいひます宮中にて宮闕より青楼に
をきかくしとおりて見事ふらうに松ハ
諸木の内にも目出度名木せかふり心へは
候ゝ正月に万人門に松をいひ并清めと
ひさ年迄の神をそへ人ある事し人間そ

松のよし井をあこ川桜ゆと年れ祝あり
是をいふゆゑに依て高砂ハ松の目出度いと
くを祝たる能なれバ初春に是を謡初
と号此外あまたれいとく初春の松におゐし
又難波乃みこうちの皇子れ御位あそひ
あつし時たくさい国よりゆんゆん申しい一紀
代りゆん此国よ渡て難波のみこと御代
をゆつり給て我朝いよくあんせん康寧
ここのしそくもんかに付て此難波乃

みこ御位に付き給ふ甚時清昌位有て
此難波の梅冬ごもりして咲さくし
花乃今をさかりぬと咲みなれバ是に
梅ハ心も若木なり哥道ゆと花のあふと
やて梅ハ法来れ花乃そうし日暮あれなき
くいさく祝言よ是を用いる甚上謡ハ哥乃
ようおゐる小依く難波津れ哥を重ひ
難波乃梅と謡ろめ小謡なり
一三月三日桃をいふ故云ゆれく西王母

東方朔なり何もて春乃調子ハ双調なり
一五月五日かきつばたなり
一七月七日七夕朝がほの曲舞を謡へし
其子細ハ昔を語りしにいへらく
風ことい夫婦乃父も度夫婦月を面白く
思ひの中に人をも月の出るを待ち暁ハ入かたの
月をおしミてたゞさへにあかりかなしミを
なしかくミしミんとなかく月を面白く思ひ
し一念ふかり二人のそれ此世をさりて後ニ

一川のほとりとなり天にむまれて二川のほとりに
た是なり然るを七月七日の夜年に一度の
契をなし給ふといへりかゝる由にて七月七日
に公の前にて詩を作り給ひしハたなばたの
向をなす日なり然に依て謡にも七夕を謡又
朝がほの曲舞をいふらしかくやうの事也
其まゝうけて朝がほの曲舞を謡なり
一九月九日にハ志ゝうを謡ふ是居去志ゝし此
なくさミ此御時志ゝーし云人其子細

有てもんまん山になかされし時かのまこと
観音経乃二くの偈を朝夕となへ奉りしに
そのきくにおきし菜水谷出来て此水をのみし
七百歳をたもち其後上を為れて菊水坪よ
利ぶかれおる此水不老不死乃薬と成目出
度のまひなり九月九日も菊をいはふに此句也
かなりゆへに菊の間おびいとうくなれハとて云
ことを謡なり

一　門出乃謡ハうたひ出立之勅をおいて出すなり
みしかく打出すなりさりて謡聞と云
義なり

一　船中もことよかいりれ謡をうたひ出た
のり次門出乃謡とハうた出りてや是ハ出た
已去其文をきらふ義なりもこ取より
乃謡を守一乃旅云なり高砂乃謡を本
とせり是あいまハと云義也

一　まさ海しの謡乃支習といへ次第を
いむなりけるも甚心掛肝要之謡乃

円小史乃なかいの有支よくかんうえ其潘を
一 うたなかまりしかや調子を羽調と用く昔ハ
なんしきとなる性なれハえちハ侍りし御
代ハ是を次と定しいて其事の道具と
て是を略し羽調は定羽間ハ其の調子
なり其ハ四季その物音の初なれハ是常
一の枝云なりかかる時ハ家乃物小用也文
羽調を木性せらるるく家よ桐鷹乃
調よしく是を号せり

一 船中の辞乃狂云ハ自然居士の曲辞 義良
先のきさうなり
一 哥の會連歌乃後なとに論是あしハ蟻通
乃曲辞ハ是可然ハ其謂ハ紀貫之ハ世ふかく
れなき哥の名人なかく御示ところをうけ
給いるし今の哥の品々を定め古今集作
説是を一代集乃頭なり其よ依て哥の
なかくハ古今集よこへたる事ハなしかるうゆへ
一 よる哥道乃あそひの後ハ此曲辞をうくこととま

一 五音乃巻謡乃大事是ニ極る所乃おもし
先五音とハ祝言ゆうけんれんほあいしや
う乱曲是五つ乃聲乃上にあらはるよく〳〵心
得へし世間にて謡を合ひ多く有と云ても五音
小謡をうけぬ人ハまへの内なり不為なくしく
うた謡ハ謡面白きと云事まての奥なり
一 万事をすく〳〵五音乃はんまん心にも肝要さ
まつ内そく謡をうたひ出さんにそや身をまもん
一 此道をよく守りて支度其調子細ハ人

小物をとくて我藝浅きと心得るに事
なかれ一物乃事物ニ在て果てなり我藝
を打しさけ惣にまつり下にはに能く物を聞
事よく上に此はさなり古今ニ云
下より上に此にも此つきなれ
かへりそ しも我よりもかくすなれ
はなり但ハまれ打度をやまひとす謡ハ喜
曲乃謡度事をなまひとなり能ハいま
しや此為小謡とハ先大作のよくかてまの

すくにして始もなく我執して道に
とそすくなくさき道と云山坂有ゆゑ
みたる道ハあしきといへて端を道にた
とへすくなく成のなき意なりへし寸一文字大き
なれハ端なき事も文字ちいさくなれハ端也
かりしとてやさしきとり読てよきの成と是
大きなる遠なり格別端の勢ひなきそえ
糸のほそきハ上へ向くへし去上へつくへし
少しハそのまゝよしといふともたくまこ

乃ことにてそ下地あしくなれハ深くとうなうし
かれいさけれハ古人の書おかれし書物に端
とハおもしろき物と思ひさいそかくのとく見えせ
先謡に心がまへんと思ふ事ハ道芸心なくハ端
に面白と云事を知らなりと見へたり甚子
細ハ端常に心に持て風乃吹ふり雨のふるに
も心をとりまもあわそしろやと合月花を
見ても思ひ合端をむねに持して徹に人乃
御不らぬ時そおもつかり時に似相たる端

口にいでゝ物あり古今の序にも和歌はその
孫をうんでつぎ花をさかんにひろく
まる風雅の玄妙なし此道の心おしたる一唯一
よう十にいたらん中に思ふ心常に持て二川
よりも百千にわかれとおもふ心にて藝
はさかりは物ありいはひ物あり趣別道は梅の花の盛りに
道度物にいはば梅は一條と本こひて枝つき
そ文にかなふ所あり花は又こゝろやさしさ
すがたくしく白ひをそへて香る物にて遊ぶ

古歌

万代を松にと君をいはひつる
千とせのかげにすまんと思へ

丈久堅の神代より天地ひらけし国の
秋つあまれみやこのすくなるや名も二
さしられ神宮に八文の国を作せす
へうきあれや大君のこゝろき長閑き時と
うやあそふあしあつれ守の神ゑし
まえらうか忍路のすく成へきうすう
奈や梅しそれ里のこや作をおうち山の

かきたく雲のうへなる玉殿に月も光や
みかくらん

右此大事ハいつれも同

一此二句ハ哥人此曲味ハかのせいをなかとすゆう
哥人ハ云事を人ことにしらることたるに心得
ぬ是も此家ひろき事あり花山に入て目を
驚し黄林に到りて家語を見するかことく似
て此哥人に此義なし一つ其一つ程に此心
をよく分別すへし是ホも又口傳あるへく

ては耳遠成へし哥人といへるとて心も
へてあるへく歌ゆうくにも深きにおゐて心の内
に格りともち深くハ甚に深といふ事如此と云
も只祝言の乃とやら成義也此哥人ハ物つ
よ紀をかなえてゆう哥人乃二字よく分別
あるへし

古哥

まさや思ひかゝ野乃これて桜かり
花の雪ちる春乃明ほの

さあきたる小物のさひしき好の我れ人や待

あるふる寺の庭の松かせこゑて月もさひしく
のきたれ草ハすれてこゝろしいかし入さきの
かなしくいつまてか侍事なくてかなしき人
実行事も思ひて乃人の我家世中かな
只いはとあく一筋よ釈佛の法代求る
ひきなへ法の声海よひゝきて導き給ふ
流ちりのしけふかそとみへて有明の行
衆ハ西の山なれとなかハあそれ好の空
松の声のさきこゆまこゑてあわれしハ深く

も空なる世の夢心何の音にかさめて
まし〳〵

一 此三まんか此曲味をハ前乃ゆへ人の
ふかくあわりたることうかいと思ひ曲味切也た
とへハ文字の心ハよし有なかつりくハす
くむるふあつとゝ成るよしハ動きち
乃人よやさしく思ひけんとて戯よひきけり
くるひ以へ今もきまかて心ハ流なかなし
此まんかの曲風桐似たり心の切なる夏

はなるゝこともなけれはこそ風姿は何となく有
へしかもは何となくすなほにて左円に心
の修行ありけれは必此風体を意と成也
うへを分とりかさりたるをかりゆゑは物よ
くかなへるやうなき事是當流の用心
なり以前にいふ秀人はよせいはやまひの明か
なるごとし此わかれには始の夕をもそむ
きとらしかるへし古文は耳をとゝめされ
なきかく深きことはきとめて物ちかく

貫之はきこえ古文あり

古歌

世にふれはたゝ木のかゝりて我念は
梅や桜をふと人をこそにまれ
ゆふへの雨あかしの朝の雲いつれ思ひの川
まなかしねさめし夜半の鐘の声けい
ふるれは山よ見てきつゝ鳴なんとしてつき
をさそふ浮しせめて猫やさる月たかくて立
たえし枕に残らさして又ひとり猫に成ぬ
そや是いちやうこそけふは枕なりゆる床の

上なりし鶴か岡の松をかくしも同穴の跡
義をなかしよりそれをたなへし世の命の
みだりなるをかしいはまて草の露のま
もひのくさんつるのかゝつては長つきさん官の
すてめ軍を誰かまて得て今の世まで
もてはやさん事にても我妻の哀あり さ
ごさは憐とゆかへ乃数ハいさなれりけしあらし
ことあかれの人心たのみてこゝ慰服ハつとれそそ
らえかんよたらつゝし て そなさこれ空にみと

詠れた夕暮の松風あらし山花ありし時
をあれ松をこそいはとつる我まゐ人より
の古伝をいはさり清し筋めてもれひさゝ
此あふきし手にふれて風のたよりと思へ共
なつそたちやる色濃まとれ松風は風しけに
吹落てたん女川の扇を名なりハ名を開
をすさましくて松風ろうこまるや
思へる是もけにあふにハまかり成へき我もれむて
ひなれを今又世をも命をもうしとむまじく

おもしろし然者征を思ひつゝあてひまう
いのちんちより弥やそさひしさ
為しけんか一大事なり昔の名人達も
此流亦とよりかましくやされは残乃
四声ハ海さなしかとはいへとも先人の義ハま
きてりされすま子細ハ思入色にいへ必要にて
乃声よなりてたるよさされすまれたとひにハ
移え文意乃道理うすく成いさされハ連哥
なとふそ意のなるとれ面白ハ成りさしやと

連歌し達そやさされは如此乃哥分きうしく
分別まつへき物也此管曲乱曲まて秘事なり

一 深夜傷 此曲味ハ芸れ花そこれちりく
小成なそ野山乃風乃物まこころもしれ木
まう浅茅ヶ原乃きえぬを見るかことし
我をめくしたるをもつくしたてゝんくしおく
乃あれなるふもしの聲ハかすり成心成し
されそ先人か哀傷乃二ツそ心得一度よ別
成を人よに同声よ流変是ましてき変

あら〳〵分別すへし

古哥　浅茅生や袖に朽にし秋の霜

わすれぬ夢をふくあらし哉

はちちし霜に声きれ〳〵たり錦るにか

たちなからしせし浪に風たえてこそ松

ハこたへて実や何事も思ひたえなんとも哉

一　も浪ハ、ふハその花を結ふいはを河とかさ

なかれ〳〵一世ハ風の前の雲霞のあひさ

まさんしやそく三ツハ水の上の泡の

の前のきえんとすいろんそんの内ニハ冬の

かなしさをつゝむこゝいろちかはれ内ニてうち

乃かんなさとありとや栄花ハ是夢のな

き乃ふハさかんなれとも終ニハおとろふるなれ

又されハ秋の光の朝によそふしゆふへに老

そとろ春さの秋まつて花さも一時の栄花

晴こゝ川に東風んしてたのしこ浪に去てか

なしくたちてすけり朝のかう濃花のうへ

苔露ようさんかなにさ物ハうらふれ

有りなきの心ちして世を秋風乃すさまじ
きむれ入田鶴乃声をなきて立て此田長
乃一声八千たりよろちをとり立てまさんあはれ
成りるかんらいをいわふれなれたるへき
一 第五乱曲 此曲をたやたなる曲也謡いまたい
たゝさなる我とたけさせてうたふハ文よ
きられたとへハ此すらるハ庭乃松なとを
面白かゝ物てちてゝひきらへて又まて成を
ひきちてめなとするを物をてらへさる人

是を面白しと思ふ是此道乃ひたしかし
たゝかるとなるハ能物と心得ゆへハ文ふ面白り
らす二様ふより狂人ふ持たちたる松の葉
をへて名なしこひなるそ後ことに面白ゆへ是を
前し乃言葉をすくれて謡ゆハていふそり龍
曲と成へきさ當時乃謡ハ狂言よりもや蘭曲ふ
成ゆへる古人乃中に於りまゆ事もなそもしこなれ
こふ成ゆ但世上かくれとしきて此道をたつる
事をまる於古文ふかよくし分別肝要之

古哥

いにしへし神さびにけりかく山の
むかしきかりしに若れむかしまで
山はきこえし浪山にかくかり桂おほしうらたり
てれなしそしを家と定ま本親子すめり
流れまに乃きむかしく浪山乃桂をたのくす
れそ西王母をうしやまれ文うりかのよるまな
きなしのまれそとなれをかゝりをなをすに
人をうめすかして三千年れ表乃花くまた秋
乃月日曇ね御代とゑみしこ挑れ世むなし

ときし起かえ治別乃うなしさ示ぬ山れ花を
そみを浦乃月をもなりめさきなん命下乃
杖うその草れ唐にあしきそれあくる事
なれきさかして人わをちすなけきしく
右此五音れ古文書誌しいえ又旅云乃謡の
ふしよ大おとつなたる事はよう声乃二字
なうよう善れ字はようはそこせ声はたて
せうまえ皮二字心持肝要せようれ聲を
そふとく声乃声をとはそく謡こ如此謡

以つて声をたすけいきをみすけはや此撞鐘乃
心ふくいたれれ謡ふしむや亦声あやをなすと
云事又有是もよし善なり甚いたれハ声乃
たをふくく謡ふもんをたくるや織物おりたち
ハ色しろ乃たを織その之あやれもんもあり云ハ白
きうへまもんと織浅黄の上ふおなし あさ
きにてもんと織かくちや乃たにて又其上に
紅なしたふくもんをはくるされハ此謡そ
おはし声を二川ふ目けてたてよこをうたい

以つて謡よもんをはくる也へ声あやをなす
といへり此心をよく分別して常ふ心ろ為謡
つかいはよろ多いれ性相ふくは朝夕心掛
肝要なり

一謡乃極りは上下と云事又是連哥れ
上の句下れ句れ心をたしかを長くゆり併
をたむる事文十七字十四字れつまりあり地
別謡ハ哥道より出たるふよりて滞りす
ふ哥を川やゆりを十七十四を三十一乃数の心

とゆるとみえたりあるかたちに其数よゆ
数にくハあまれこそ是なりとみへたり

一 始しよかゝる位と云事文字を右乃上下の心や
文字うたりにまへと長くいけて後を云
寸六寸乃位といへり是字つきて此心のゝ縁
成よりてかゝる位と是を云たとへハ六寸
と六寸と合は尺よあてゝまは謡を前をハ
又おもしろく移て後をうつしハ六寸と六寸
に成はて謡をきゝあし此ようにきこんの心のかこ

ありぬに依て六寸字に謡はへて尺よあふ
やかなかうゆへにようりて長さを湯とうみし
くさを陰と定陽湯和合乃心やたとへハ其
乃日なかう出れハ冬の日みしかし世間を一年
の内よ春夏を陽とし秋冬を合陰湯
和合とみえたり又云此ふしを長短乃ふ
しと云なり

一 流れに立はそれ謡指乃事古実より調
子をめくり移て謡へし流々あひきそて謡

扨て前文字一つの字分別おそく付なり
大夫と同格に謡出しはりんと思ひ候へハ謡出
し候をね拍子付れハかふしそくしくに
なき座ハ一川口なく謡座ハよき二人
ハ拍子に無しなしへし大夫乃謡よく吟し
うかふて謡へしもし大夫よりもや
謡出して大夫なくさとれかきりちからなくと
たとひ大夫下手なく候共上手なりとも
大夫へ付へし地別つきよかきてすゝ満優

者とも小何にて上手よれよりあひ出て大夫一人
一 下手成とも大夫をうかゝふへし是上手なれ
よきなり仕舞の時大夫にもすれてそんく
ふきつまおそくハそそつ仕乃方よりせまよ
しきなり
一 謡乃いきつきれ変母能なとにあらく
ゆといきをつく事みえすしさハ抱也いきき
つき庭くいかゝ大川のふつきてよし
一 地謡を謡ハ時扇をもえさうてふねうかめ

ゆくそと心乃拍子をおへし拍子たらくお
変るへうられ
一謡に一字ゆり二字ゆりと云変ハ一字つゝにて
二字乃ある所一字つゝと云又二字ゆりにて一
字ゆるを二字律ゝ中にゆり三つあるなり
乃ある事すに近心のゆ様にた律ある所ゆ
より謡よきすしあしきら様まし
一文字送りと云事ハ長き字二つゆりきは
時ハ前の長き字を謡出しさこさ文へたるや

く也付ハ謡かゝりし是も文字送也いへり
一あけん二川有曲節是を二段曲節と云長
き曲節に云物ハ長き子細ハ長き曲節ハ謡に
むすき甚むつをあゝせ海しき為にあけん
を二つ所にゆ持入れをてゝきにして曲節
此位を定初乃あけんれもし後のあけ
をハかろく上の家是も陰陽乃心あり也
別ある乃位をもし字二川程まつく
と上後字川をかゝく地へ渡す

事是習なりあけれはうたはけれは地まて
もうたなくなるもれや甚心掛肝要なり
但もし地謡むさとえやく成なりて又あけれ
なくおさへ座しあけれは一大事也上は悪
へは拙別の位よそむきむさとうた初よ
なるなり

一和哥は謡根初を何となく拍子よかまハぬか
なくとむかふ舞の内より察心有てよろ謡
ふし後二川三川なく拍しとの心をよし也

いつりあまりむさとはなへ初心成物と

一謡なとうたへおうきてある事は定謡をうへてむり
軽初心なくおうきて悪事有甚時ハ謡なとき
すくよ律さへなつき謡物と是習なり

一謡そこなひは前のうたへ付はへもちへ付へ
し前の事すれは分と謡をもはもれなり是
初心成そのさ謡そこなひはとて気をうしなふ
なるなや尚夜のけうと思ひてたとさをなし
むへしけつをうすれはへは後まそ不如是

それあり

一 四月朔日同四月八日なとハ謡様乃小謡
むかしハ

一 小謡乃謡様あゆミをきこふ二天寺なりけり
謡あし 松たくきとうたふてよし甚まし 松た
くきゆハ志きうれ時小ハうたハねといいけき
此小謡も同前あり

一 音曲声出口傳 一調二撥 三聲 調子とは
撥り持せ吹拍乃調子を寄とすてきこ合そ

まして目をふさきていきを内へ引てさて
声を出すハこまさき調子なれハあまり〳〵わる
あり調子をかりを添てきかに合すし
て声をあハせことさき調子にあふ事
あるへし調子をとる撥にこめて声を出しゆ
へに一調二撥三聲とハ定せ又三調子を八
撥にて持声をとる調子にて出し文字をとれ
口ひふかくミ口傳へし文字にかゝハつねに拍
乃曲をはうかへ乃せう歌をれあいをそ地へしき詩

曰情發於聲 聲成文謂之音

一大夫謡ハ不自然ニすなほに直文有其時思ひ前
次第ニ地より付其付様乃ゐすは一人ゟ思ひ
出しゐる人付そつて実かしこより口こに付て当然
物之一人付し人も調子ハ遠いおゐ候しまゝかし
て付へし たとへ一段ふてはけれ地也ハかやうなるす
同乃前ニおゐき事ありまとうし心得て付ハ
人をあハれハかやうなれハ直肝要ニあしく付
へし 太夫も乱とうしあひさゝきを又よろし

直ニ又聞てよきてあくきまもゐあり

一曲小あまる事ゐしあまりやも一段しかけれ
文字あまりハ訴しふしハ大略てよそかさ
地しあまり少しあるすゐ音曲乃間わろく第一のき
きゝくき地せうしゝあり心掛嗜へし

一謡ニ訴云ハしおくれ声乃上かちをなす
口呂律二ツより出るものなり呂と云ハよろこふ
声出息乃声なり律と云ハかなしむ声入
いきなりと云なり先根本と心得へき也如此候

云乃声ハ拍を持なして氣に心を付ゆて出す
声なり是つよき云声也是ハ呂乃声の事也
う強せきを見かりてほそき声ハいきを出
そきにあてるへし是呂乃声慢声之儀ハ後
云也一なりまたある悲声と云ハ声を持よ
して拍をゆるく持是やハうかに弱き心也
きをゆるく拍ハ入いきれ心なり是律乃儀

一 哀なる声ハ強なり儀ハまたある之名付て
弱に強云乃声にそて拍をたる中へよ間子
れかる事を前としてまたあるハ拍をゆる
く持中へに間子れかるをよく移ろ後

一 謡よ曲節とやハ一ゑより出るなる中へよれ
謡にハ黒白乃調なり月にも儀ハ公文字にも世に
そ節をそへたり其名を謡と云よ曲節と
云なるをは前よく移ろと知へし此の事を云
ハ曲節ハ拍子なり拍を持なり只謡ハ声乃拍をね
て拍子とし甲いふそへたり儀ハ曲節ハ拍子より
拍をねゆへよ節と云文字を曲にそへた

又去猿小曲舞といひたちて謡にさまある風
情より出る音声也然ハ春ハ各別乃事にて
曲舞ハ曲舞れ當道にくあまねく謡古文ハ
なかりしを近代曲舞を座にうつして小謡に
ふしを付てうたへて殊おもしろくさゆ
なれハ當時ハ殊更曲舞乃かゝりまで一れそて
あそひとなれり是ハ已文申楽乃能に曲舞
をうたひ出したるよりて此曲あまねく
ぞてあそひしなり去ハひとつ乃曲舞乃かさ

いふになり去猿小曲舞かゝりれ曲をえ大和
謡と伝りかて又猿小曲舞ハすのこゝさをや
つゞきうたふ世に成行ハ小曲乃たおかつて遠す
を去りれ曲舞乃かゝりを面白き事肝要
なれと是をひく事とハ中さぬ思なり去なか
ら此稽古を去りされことゝるへき道をと
こゝるへき為師をたくみにて成へき事
本意を接しむく松曲舞謡乃稽同と云ハ曲
舞拍子を弥よ謡曲なれハ文字をえ拍子

り詩にかゝれ文字を白うりりをうろし文
拍るにしひろりてによりて下しくなまなる正
風それともひとかりりに開えて面白き風
なす是拍子然面白き事し称也玄よ依て
皆なまる下も一绊乃かゝりにきこゆるや是
を曲節かりれ風雅と号只淫とや八拍子よ
てかさなる事をあらたてあられまてに淫也
よ文字濃正まさしれも玄猶よ淫のきい
そふあらいれて何しことそかりして一句両
はむまそてみてふすあしてこゝろをとゞめり淫人を
きゝて人も同心に一曲乃かんはしうす剣たし
き感あり

毛詩云

正得失動天感鬼神莫近捨詩

かくゆるいつるも此感也此ハ亜かんあるうゆへよ
ちくとうをあらはすと云歹心をおとろかす
かんを天地にかすと云かくこきをやはらくるに
形も鬼神をかんせしむるといへり此ハ淫乃
正風をはあらはさすして又人に文字をならべ

を正也甚心は上手はならぬこと云ハ此正をよく
なれし正ハむさんありされバ声あやを存す
也と云事是あり

一謡は句つきいきはきと云事一字をいれて
一字をいきにする事有句はきと云ハ寄切
時いきをつゞりてうつといひ又謡出しを白河
きと云あり

一大臣はき唯今参詣仕以下おなじく山伏はきこひ
く同次第及行乃事上より

一僧はき思ひ依上より同次第道行下より

一男わき中より同次第及行中にて

一女ておとこ只今急依下にて同次第道
行中より

一ぞうり僧女ておとこ依にて謡てにそ上より

一せうして中より

一かへして上より

一山伏女て上より

一物くるい上より

一

地氣を上て
音曲氣を上て
微く下へて
文字こゑやかにとりて里
志ゆ乱面白く
たゞかへ入て声
おやう二室せ

色れ字けそとくれりしかへ行當時ゆう
一思さんれ又思んと声ハ　一手さ流くつよく流

一ちん八中成物流　一ち百八ちん乃下
一の八ち百乃下　一又かいと思んより上て
一くせの声心をたしやかに持へし
一ちそれかつり八うつりくしく流へし上紀の
流八つよく流へし志てれ流かゑて有とき
乃流ふもい流くあり系し
一女乃流八いかにも志かなる為かうつくしく流
色し但物和かにして心持ちゐへし
一男れ流是をうつくしく流へしさかなる

よくきゝはあるし是を物初ハ遂へし

一ひさ面乃語ハ弟一ゟかくせなれ所ゟ小嗜へし

一せうなと此語ハ常々そこひてあまくなれ所うし小語へし

一軍物語なとハいかにもうつくしからす詞をよつよミをなすと語へし聲なとも呂をなすとしかんをすてなく語なり

一神ひなと佛法なとハいかにも其意に殊勝小語へし

一流きをそれなと人によりかさよりていかにしへを語物語是なとハいかにもよくせきうちんとなし志心をむねに持てあまれよ語へ文云物初を書よれくれ共つとふれなれ子をうしなひなとし多ある物思ひ乃初乱ハ右

一と同前なり仏佛神乃とかやまめきんのそれなと見入て物小初ハ各別之それまさいふをそあらくとつよミをなすまし　すさましく語やいつまも語乃きれく心得肝要なり

一 ちいさきにて小謡の稽古の事丈夫のふるまひ児童
の好みにいかにもといかにしとやうにあらく
哥舞をさせて心よく謡うたはせ候なり
一 上人なとはちいさきにてしかも志川をならへよきと人
のうたひやう甚心得有へし
一 貴人高人への向うけは常は世間のうたひやう
はなく心に持へしいつれも大かたせ物なれともさつ
へしあらたにせは事肝要なり仍文あまり
かせすくせぬは事かしき物なりしなまあひ
のまん肝要なり
一 鬼神に物云事是いかにもつよくこはく
よわくとおもしろからぬ様すにたしなみに
とひかなへし神へは其よ謡る云葉をとかす
へし鬼へはおそるる心なり
一 ほそき川なとはちいさきより謡のなさす
いかにも心をもち候てたつとく謡かくへし
一 内裏せうらになとはちいさきよりは人に
らぬ謡の云うさを遠くへし何をも能にて云ハ

世間乃物まなびなかれこそ商乃ちからひにハ然
至りにそ得るべし
一 家人うちわれものなとに物云する事是亦
世間に常にあることなれとも是あかりよ
升能みくわしく分別有へし
一 まかりて万事中にも人なと云詞をかはす
大事之分別可傳有へし
一 閑寺なとにまいりてハ然心を持つ
よく嗜ミ申へし

一 人商人是をいふにそ其やれ然心持つよく
あらくもしうまへし
一 いかにさまこりすまやさ山きやまなとれそそ
みよき貴僧高僧云乃上人なとハ
かそくきりくむりいをわしさけて物をも
ふへし是心持あり
一 物ねつ乃まそにいふ者はうつくしかり分す
してをりやりにもいたへし其にもいふ者はへ
そにみそ然物にくはた猿よりへえとてむさと

こゝろあれこれハ心をもちなり

一大夫濃謡拍右乃ときそれ〳〵のまへに
謡乃為扇子此心持同前

一曲にあまる意趣しあまりハかろしかす
文字あまりハよろし文字あまりとやらんて

一切悪文字を心遠ぶハへんあまるあり〳〵
あまりとやハてかんかうあまり乃心えてにんね心
ハいひならそ云捨ふ乃あひきふようて心よ達
ぬへともしたふそよ慰れたしくろしうへしほよ

くし心得分て口傳之し手にわん乃そし
乃事ていれをとりけそしかやう此おもり
細君乃心をもちくへきやうしかりとよ悪れハ
ゝ家しうし手悔しゆしやは大略てゆえ乃定
字悪声せ也て謡ともいろはよとよハろき
ハ想ありまるな乃文字此うちをいひ事なる
ありしさをえてかえ此字ふてゑ流へしかし
て大略てかえ小有物あり

一せまふ乃事大夫乃せれふよきれせまふ

ちかふへし拍子乃あひしらひ同前なり
大夫ハ物数よあひしらひてよしよきハい
うかにもこ悉をうたひてよし
一 脇乃大夫ハ時そいうかにも序のことをなといふ
ハなこて弥ふうたふへし
一 女乃大夫の謡ハるかにしきれやうかに謡へし
一 せうし乃謡いうかにもこひて謡へし
一 物狂乃大夫いうかにも音曲よかゝりをするへく
と可謡うとハ差よ謡ハなをいうかの次

一 かふ乃かさりなとの大夫いうかにもをもんよ心
を高せうし心持て謡へし是謡の心持の
習なりよくしく其心の能の肝要也
一 拍子乃よきさ心そて謡のおもしろきいかにも
拍子をしろかれ物まて音曲かましき事も
なく只するくと謡へし其人乃まさに
く拍子の付たる謡の色ハへくて其曲
をなくへきやうなくはいかにもしく大さ
乃謡の付たきハあしき中一なりけらく

とかく謡の色以事肝要也ちやうとしさ
これ謡乃字をたちきらりと別になり
てきこゆる事第一乃上手これよきなり
よく／＼心得肝要なり
一二字あがり二字さがりと云事有一字
謡二字目をあがるを一字あがりとてく
さがりふし乃節也又二字あがりとやハ二字
謡て三字目をくだるを二字さがりとやて
第一乃あしき節なり

一三字あがり三字あがり三川ひきさとや
こゑの始ふ悔し乃事にて以三字あ
がりとやは三つ川にてあくるをやあり
声入以て謡よくし以てより第一聞なく抑地
あり是丈さふきらふ事あり三字さ
がりとやハさくるふし乃三川あくへて以
あたるを三字さがりとやあり是大さよ
きらねふしあり三川川とやハひくふし
乃三川あくひくあるを三川ひきとやあり

謡乃詞なくとも聞ゆる事はありし之路外き
らふ嫌しなり何ほどもゆる事もなし毎ハ別
にても同名なくてはなくし其上謡ぞ
都くにて雅乃おりかく成にてなりよく
心掛へし
一謡とかきれて小さき事小なりそ出るを
けきなんと当然なり
一付しき謡講なき時乃謡摺乃事謡
出へにも大略乃取ハ謡すへにかくよろしには

一同音の付けあひ乃事猿楽乃八つよく
付へし去んなるあいさなき事つくしいなか
とれをいかなるとよしく也付へしそりに
きくと紀乃あとなき付合かんあんや
いかにも似合うへくしつ事もへし脇在
鬼なとれ付ねいかなるつよくともたし風の
に付へし何事てそれく濃付相乃心持
肝要なり
一世言葉源氏供養なとにてきれ謡を

きこちへなかくせずとも此時乃謡相と
に成て心得て謡さきへこひする謡ふる
へし是習ありけるに此事何れへこそ渡
るへし此たくひの能あり

一 音曲をうたはんと思ひて其前をいふなす
らせと謡をつれ小音曲を謡へし拍子
いろふしか海しこと事を謡へし音曲乃
いかにもあきとをれありかつ〱しこと曲を
うたはんと思ひて其出來をよく〱に謡あり

習あり

以上謡乃極意八十五ヶ條此巻よ記す
尓大形是より奥深事あまり有間
敷候つ之去百番うたひを志りて一番うたひを
合かつし也と云時ハ奥乃統ハなきなり
きこえしハ笑相乃事も人あまさ志
ましてよりしよ我もくなきさハへて
右此傳書ハ以て深く成ハとかく秘
書とやハいかにも奥深くかくへきを

とりて奥ニ寸